

Ⅲ 主要遺物の概要

a 入舟遺跡・大川遺跡出土和鏡

青木 豊（国学院大学文学部）

入舟遺跡出土和鏡

入舟遺跡からは現在までのところ2面の和鏡が検出され、それらは菊水双雀鏡（図15-1）と菊花双雀鏡（図15-2）であり、前者はGP-1墓域内より検出されたもので、出土状況からも副葬品であることが窺い知られるものである。一方、後者の菊花双雀鏡は遺物包含層であるI層中からの検出であって直接何らの遺構に伴うものではなかった。

菊水双雀鏡（図15-1）

本鏡は擬漢形式の菊水双雀鏡で、面径8.1cm、縁高0.8cmを計る。

鈕は、ほぼ正円形の亀甲を呈する亀鈕を配置するが、亀甲部の詳細文様は錆化が著しいため不明瞭であり俄かに判断し難いものとなっている。

界圏は擬漢形式の特徴をなす所謂特殊圏を呈し、縁はやや丸味を帯びながらも垂直に立ち上がる直角式外縁を呈する。

鏡背文様は、内区全域を波間に漂う菊花を表現した菊水文様で埋め尽くし、背面中央部上端に双雀を付置する構図を鋳出する。一般に菊水文に描かれる菊花は、下半部を水中に没した形の半花状に表現されるが、本資料の場合は満開花を描いていることが特徴としてあげられよう。

また、菊花は篋押しによる形成ではなく、スタンプ状工具による押圧により雌型製作がなされたものである。双雀は、口嘴を下方に向け相對する固定對向形式で配され、それはまた亀鈕の龜頭方向にそれぞれ向けるものの、接嘴するには至っていない。

鏡背文は全体に形骸化が進み硬渋したものとなっているところから、本資料の製作年代は室町時代中期～後期の所産であると看取される。尚、金質は青銅である。

菊花双雀鏡（図15-2）

本鏡は、面径11.3cm、縁高1.0cmを計る菊花双雀鏡で外区に鋳造後の双孔を有する。

鈕は、やや大形の花蕊中隆鈕を設置し、界圏は中線単圏を呈し、縁は直角式外縁を採用する。

鏡背意匠は写生手法によるもので、内区の下端に洲浜を描き、その洲浜の右側から生ずる菊花を圏に沿って大きく左回りに撓め、その先端は洲浜の左端部に今にも接しそうな勢いで表現している。

中央より、左寄りの上部の花の合間に、概ね上下に相對し接嘴する双雀が自由写生形式で描かれ布置されている。

外区は、洲浜の延長部を除きこぼれるばかりの満開菊で埋めつくし、更にそれらは内区と同様に篋押しによるものであり、菊花の重なりにより遠近感を呈出したものとなっている。

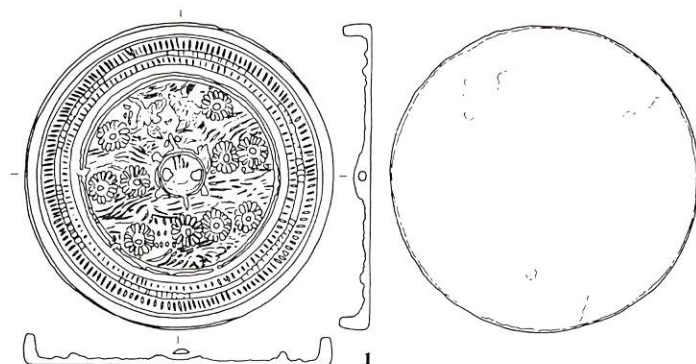
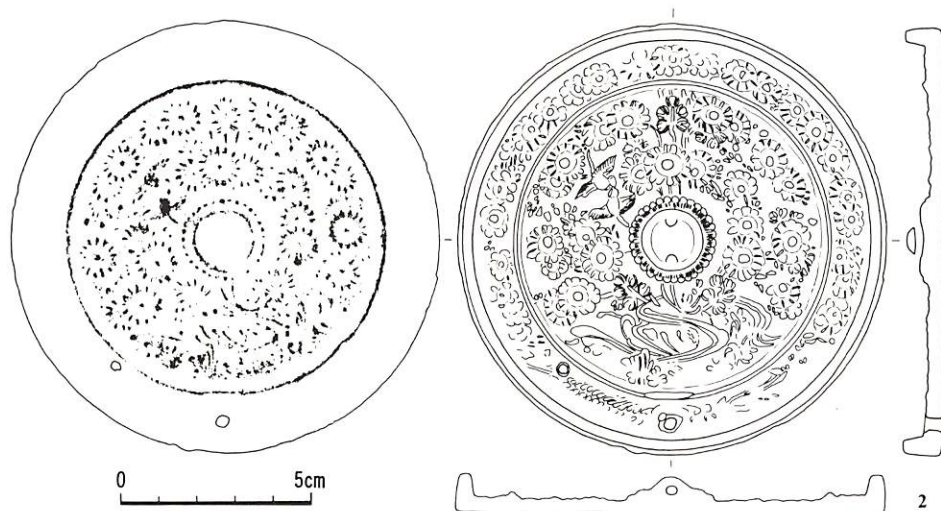


図15 入舟遺跡出土の和鏡

- 1 GP-1 出土
2 X26Grid 1層出土(2孔あり)



1)



2)



3)



4)

写真16 入舟遺跡和鏡出土状況

- 1) GP-1 遺構検出状況
2) GP-1 南頭位とみられる
3) GP-1 西側より伴出
4) X26Grid 1層出土

金質は上質の青銅で、全体に錆上りも良好である。

本鏡の所属時期は外縁形式及び意匠表現等から鎌倉鏡が隆盛を迎える鎌倉時代中期よりやや下の13世紀極く末、ないしは14世紀極く初の所産と観察される。

本鏡の性格については、前句の如く遺構に伴うものではなく遺物包含層内からの出土であるところから不明であるが、本鏡の性格あるいは使用方法を示唆する唯一の情報は外区に穿たれた鑄造後の双孔である。本双孔は釘等を使用した打圧による穿孔であるが、穿孔目的は通常であれば寺社の荘厳飾りを目的として内陣の梁や柱に鏡を固定（写真-19）する為の孔であり、本事例は中世和鏡に於いて多見されるところである。

また、鏡の使用法のひとつとして御輿につけられていたものとも想定されよう。

御輿は神輿しんよとも呼ばれ、御神体もしくは御霊代が乗るとされる輿で、その歴史は古く天平勝宝元年（749）に、宇佐八幡を東大寺に迎える時に用いられたとの記録がある。形状は、多種多様のものがあり、四角形・六角形・八角形と形の複雑なものまである。通常黒漆を施し、その各所に金銅製透金具類を多用することにより美装し、屋蓋中央には鳳凰または菊花を設置する。当然、本体下部の台には肩に担ぐ便に供するための二本の棒を縦に貫いているのが基本形である。

鏡は、神輿本体の四州に荘厳を整えるために取り付けられている幡・帽額・華鬘ばん もつこう けまんの飾り金具に嵌め込まれ用いられている。

この神輿に具備されている鏡は、神輿全体の荘厳を呈出させる事と、それに加えて基本的には、神体が座す神輿の周囲に陽を反射し目くらまんばかりに光り輝く鏡をめぐらせる事により、神輿に忍び寄る邪悪なものを払う事を目的としたものと看取される。

武蔵国の総社である大国魂神社の神輿がその代表例のひとつとしてあげられる。更に本例の場合、遺存する中・近世鏡を観ると神輿の荘厳のみに留まらず、多数の鏡をつるし、そのぶつかりにより音を故意に発生させていたらしく、驚く程大きく変形あるいは破碎したものも数多く認められる。

この点は、後述する大川遺跡出土の変形の著しい菊花散双雀鏡（図16-4）や破碎鏡である菊花（？）双雀鏡（図16-5）に共通する一面である。

順当にかかる観点に立脚すれば当該和鏡は、前句の如くの使用に供されたものと考えられるが、本州と異なり北海道域の場合もうひとつ想定せねばならない事は、アイヌによる和鏡の使用である。アイヌにとって鏡は、鏡の物を映ずると言った映像具とはまったく隔絶したものであって、あくまで宗教的儀式に供されたもので、このことは鏡の出現時以来よりの精神観念の産物としての鏡の合わせもつ一面を象徴するものと把握できよう。

なお、アイヌの鏡は単品で用いられる事は決してなく、アイヌ玉等によって構成される頸飾りの「飾板」として使用されるのを常としている。また、アイヌの玉飾りは二大別され、先ずひとつは一連の中央部に「飾板」を連ねたシトキシトキ（写真-20）と、他方はガラス玉のみを連ねたタマサイタマサイと称されるものである。

後者のガラス玉のみを連ねたタマサイは、アイヌ婦人の装飾品として必要欠くべからざるものであって、代々母から娘に伝える母系の宝物と言えるものであった。即ち、それはある意味では女の魂であり、護符であり、宝であったところから婚礼調度の第一の品とされてきたようである。これは江戸期における所謂「ボテ鏡」に対する観念と同一であると言える。

これに対しシトキは、重要な宗教的儀式に用いられるものであって、同じ頸飾りでありながらもタマサイのそれとは使用・意義をまったく異にするものであった。

ただ、シトキの中央に垂下する飾板は必ずしも鏡に限らず、種々の金属物を使用したものが認められ、その形状も円形を基本としているようであるが、中には釧・長押金具・引手金具・簞笥の飾り金具等々の転用例も散見される。要するに飾板は、光沢を発する金属性のものであれば良しとされたようであるが、抜本的には光るものは邪を払うという基本観念がアイヌには強くあるようであり、鏡をシ・コ・ル・ン・ト・ン・ビ（眼の光るもの）と呼称するところからも、飾板は基本的には円形を呈し、光を放つ鏡である事を第一義としたものであって、それはシャーマンが邪鬼を払う呪物に鏡を用いるのに基本的には通ずるものと考えられる。

以上のようにアイヌにおける玉飾りは、強い霊力を持つもので精神を高める具であり、それに鏡の第一義ともいえる辟邪の観念とが相俟って、飾板に鏡を使用することにより、さらに強力な霊力を期待したものと考えられる。

このような観念に基づく、アイヌによる鏡の使用であることも当然予想せねばならない。

更には、本州に於いて中世に寺社で荘厳として使用されていたものが、その後当該地域に搬入された等々、そこには種々のファクターの介在が予想されるが、にわかには断じ難い。

大川遺跡出土和鏡

大川遺跡からは4面の和鏡が検出されているが、詳細に述べると図16-4・5・6は発掘調査による検出であるのに対し、同図16-3は1924年の秋に大川遺跡より耕作中に出土したと口伝えられる和鏡であり、調査によるものとは異なるものである。

今回調査により出土した和鏡3面は、いずれも遺構に伴うものではなく、4・5・6はそれぞれH50・H37・J39 Gridの共にI層である遺物包含層中より検出されたものである。

これらI層出土である、同一層中出土鏡3面を観ると4・5の2面は中世和鏡で室町時代後期に比定されるものであるのに対し、6は江戸時代後期の所産である柄鏡であり、両者の間にはかなりの時間差が介在することも事実であるが、同一包含層と言えども地点が異なるところから即座に4・5の中世和鏡の伝世を云々するわけにはいかないようである。

以下、それぞれの鏡について観察してみると次の如くである。

唐花双雀鏡（図16-3）

本鏡は、面径 11.0cm、縁高 0.8cmを計測する擬漢形式の鏡で、金質は黄銅を供する。

先ず、本鏡は前句の如く1924年に発見されたと伝えられるものであり、更に昭和3年発行の鑑

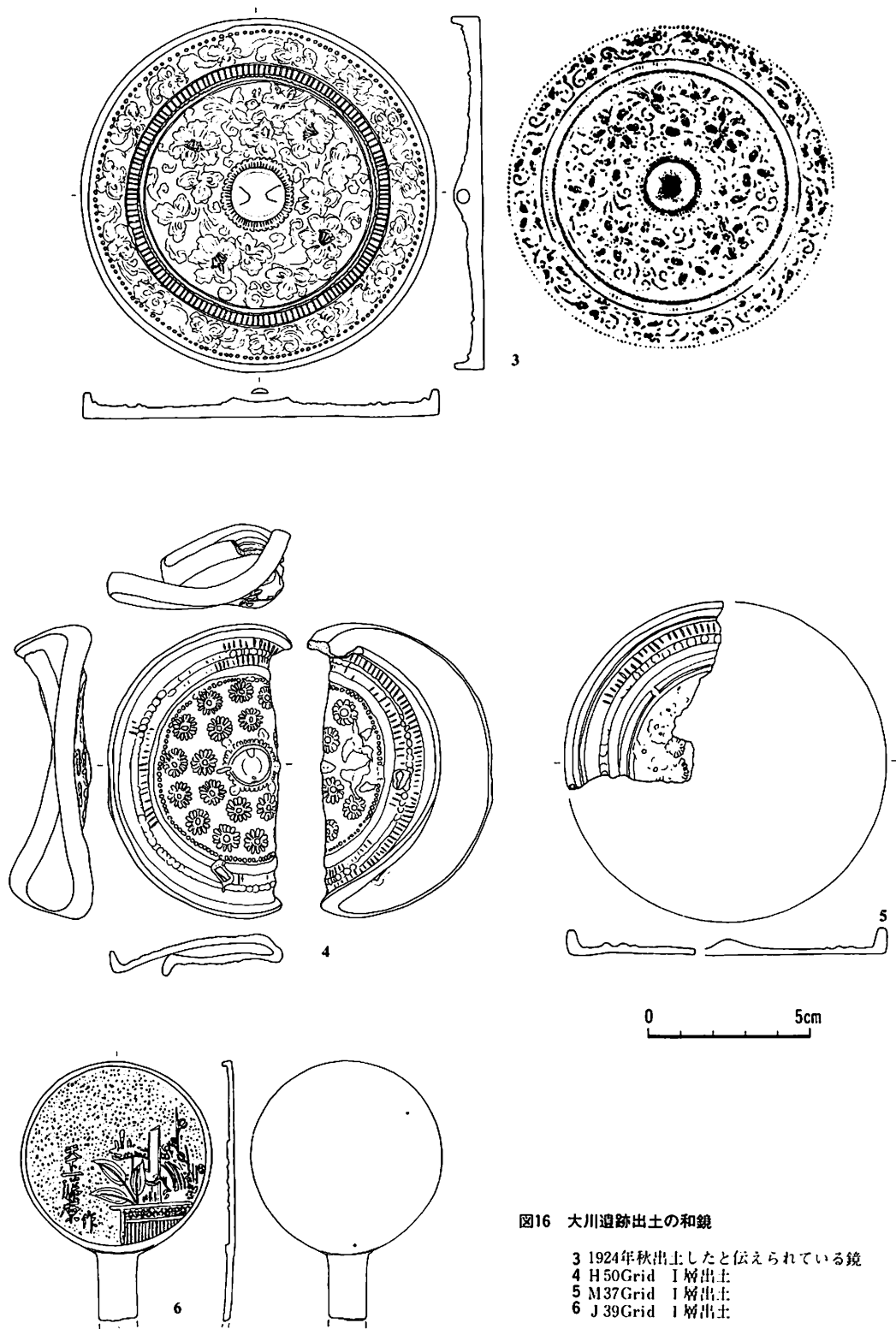


図16 大川遺跡出土の和鏡

- 3 1924年秋出土したと伝えられている鏡
- 4 H50Grid 1層出土
- 5 M37Grid 1層出土
- 6 J39Grid 1層出土

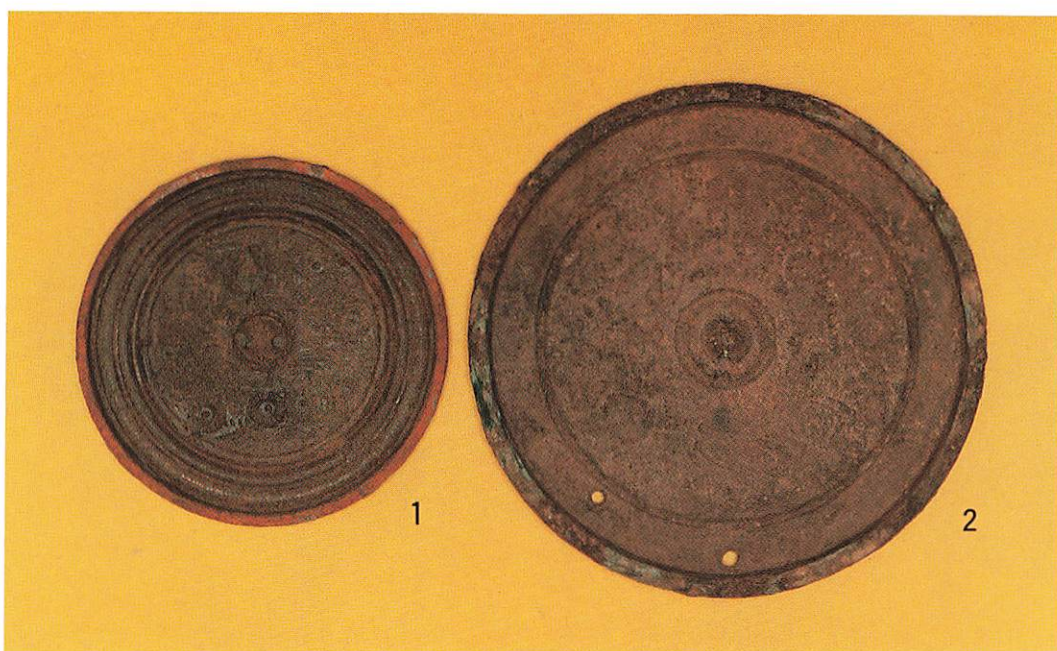


写真17 入舟遺跡出土の和鏡

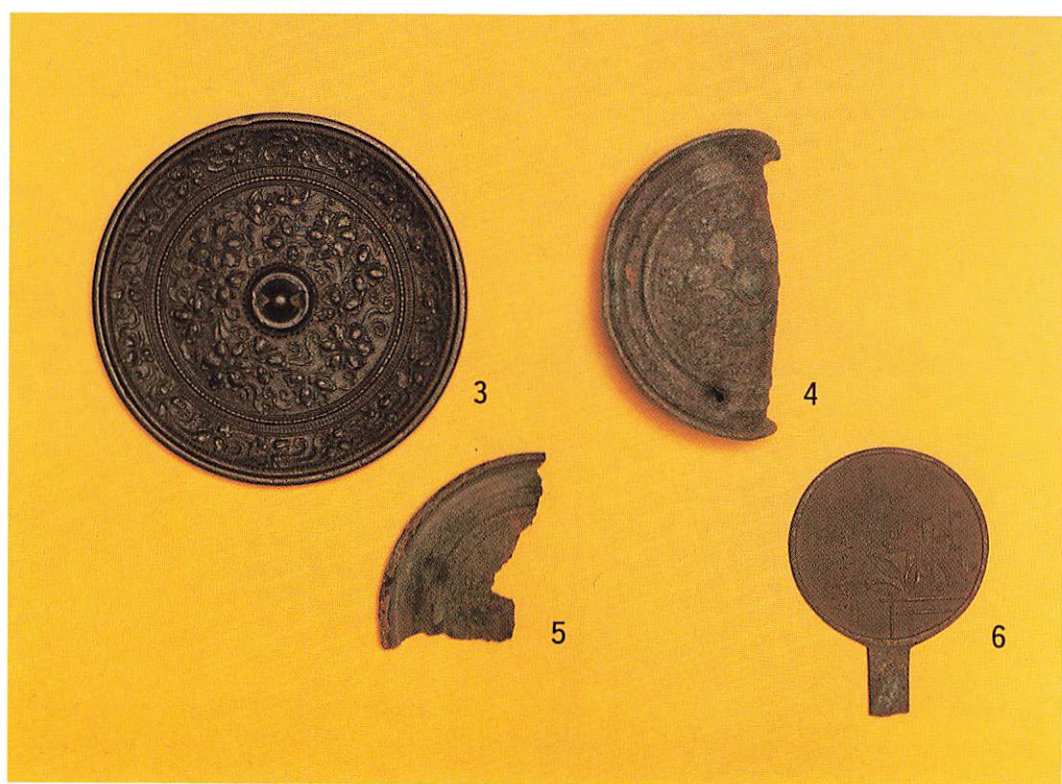


写真18 大川遺跡出土の和鏡

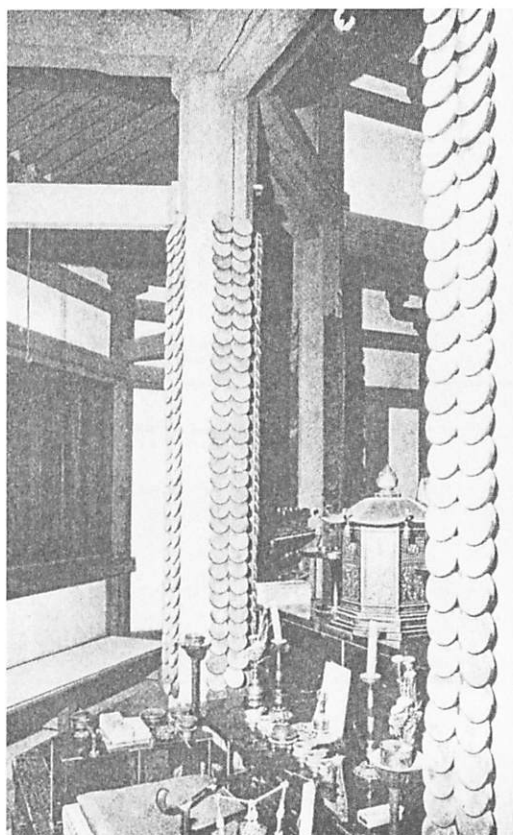
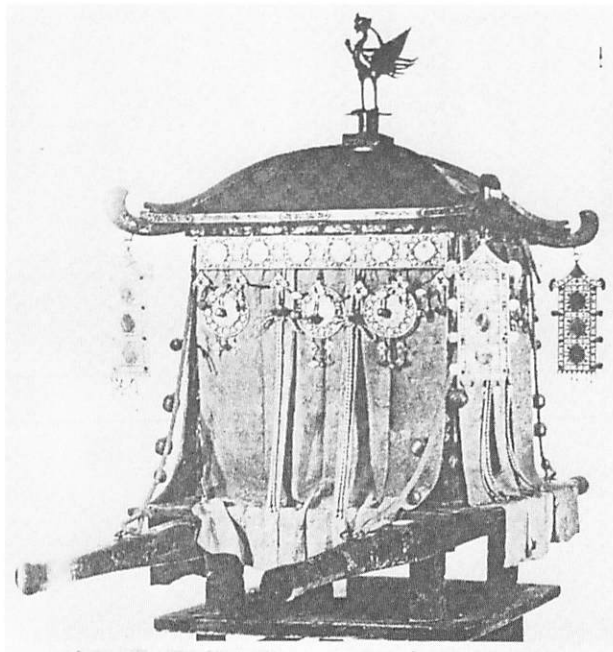


写真19 法隆寺西円堂内陣の和鏡(『法隆寺の至寶』より転載)



写真20 シトキ (釧路市立博物館蔵)



▲写真22 神輿の図
(『年中行事絵巻』より)

◀写真21 菅田八幡神輿
(鎌倉時代、『原色日本の美術』より)

定書が今でも添えられている。鑑定者は、漢式鏡の研究の先駆者であり、考古学史にも名を刻む当時東京帝室博物館歴史部長であられた高橋健自先生であり、先生によると南北朝時代の和鏡であると鑑定されている。

鏡式、鏡背文様、金質等より先生の鑑定通り本鏡は典型的とも言える南北朝期の所産で、鑄上り等も良好で所謂上手の資料である。

鈕は、花蕊座中隆鈕を配し、界圏は擬漢式特殊圏を呈し、外縁は直角式中縁である。

中外区ともに端花とされた唐花を復刻し、埋め尽くしている。匱使いは軽妙で、鑄上がりも良好である。尚、内区上端の唐花の間隙には接嘴する双雀が対置式に付置されている。

特殊界圏は鈕より外縁に向かって、先ず細線、次いで連珠状隆帯、簾状文、更に細線と言った4要素により構成されている。

本鏡は前句の如く南北朝時代、具体的には14世紀中葉に比定されるものであるが、その良好な遺存状態と現在有する色調からは口伝である1924年の出土と言うことは到底考えられないものである。基本的に本鏡は伝世鏡であり、出土鏡では有り得ない。それは入舟・大川兩遺跡の出土の和鏡と比較してみると一目瞭然である。それも金質が白銅であるならばともかく、黄銅であってである。

菊花散双雀鏡 (図16-4)

本鏡は擬漢形式鏡で、面径は概ね 9.1cm、縁厚 0.7cmを計る。概ねと記した理由は、図からも理解できるように本鏡は外圧により、大きく鏡面側に折り曲がり、まさに餃子の皮で包んだ状況である為である。と言うように本鏡は本来の形状を大きく逸脱し、変形をきたしているが、しかし破損はしていない。中世和鏡がここまで変形したものは極めて稀であるところから、何らかの人為的臭を感じさせるものである。

また、加熱痕を留めるものであり、その為遺存状況及びかなあじは悪いものとなっている。

鑄は素文亀鈕で、界圏は擬漢鏡特有の特殊圏であり、鈕から外縁に向かって連珠文・六花文・簾状文・7連を一単位とする複円断続隆帯・簾状文・細線により構成されている。

外縁は内湾気味の直角式中縁を呈する。

鏡背文様は、匱押しではなくスタンプ様工具による満花菊を鈕を中心に二重に配することにより内区全面を埋めつくしている。意匠としては形骸化したものとなり、雅味の感じさせないものとなっている。

更なる特徴は、釘等による乱雑な双孔が穿たれている事であり、本鏡の製作時期は鏡式・鏡背文様から室町時代末に比定されるものと看取せられる。

菊花(?)双雀鏡 (図16-5)

本鏡は破碎し大半を失い、約4分の1程度を遺存しているものである。

面径は約10cmと推定され、縁厚は 0.8cmを計測する擬漢鏡である。

鈕は鏡式から判断して亀鈕を呈したものと推定されるが欠失している為、不明である。

界圏は擬漢鏡特有の特殊圏で、内側より外縁に向かって細線、六乃至は八花と観られる花文隆帯、簾状文、連珠複円文、簾状文、細線文より構成され、外縁は丸味を帯びた直角式中縁を呈する。

鏡背文様は、遺存部分が狭少な為、断定し難いが恐らく洲浜を下辺に配し、洲浜の右側に菊花の株を描き、界圏に沿って枝を左にたわめた構図を採用する菊花双雀鏡と推定され、遺存部分は洲浜を下に置いた場合、左上の4半部に相当するものと看取される。

金質は青銅を用いている。尚、肉視のため不明確であるが、火中しているようにも思える。

本鏡の製作年代は、室町時代後期の所産であるが、4の菊花散双雀鏡と比較した場合、ほぼ同等か、あるいは僅か先行するものと看做される。

ちくばいたけがき
竹梅竹垣図柄鏡 (図16-6)

本鏡は面径 6.0cm、現存柄長 2.0cm、厚さ 0.2cmを計る小形の柄鏡である。

鏡背には、竹垣のむこうに青竹と老木の梅樹を背面右下に寄せて描いている。したがって、背面の左半部と上部は大きな空間となり、その結果洗練された意匠となっている。

また、空間部は砂目地となっている。本砂目地は柄鏡に一般的に施される特殊なものではないが、鏡が小さいだけに同じ砂目地でも新鮮に感じられる。

背面左寄りに「天下一藤原作」の製作者名が陽鑄される。

柄は基部より 2.0cmのところで折損している。製作年代は江戸時代後期の所産であり、当該期の小形柄鏡は今日のコンパクトに相当する懐中鏡もしくは奉納鏡として一般的に製作されたものである。本資料の性格は両者いずれの用途か即断し難いが、先ず鏡面に図示した如く2個の鑄造の際に発生した鬆穴^{すあな}が埋め金される事なく放置されていることと、更に鏡は、鏡縁部に合せ範鑄成ゆえに生ずるバリを整形する為にヤスリで研磨調整が施されることを常とするが、本鏡の場合大ヤスリのヤスリ目を各所に留めている。つまり本鏡の仕上げ調整は入念になされたものではなく雑なものであったことが窺い知られる。

即ち、鏡面の鬆穴の無調整と鏡縁の乱雑な調整から実際に使用を目的とした懐中鏡とは想定し難く、むしろ実用を目的としない社、あるいは神棚の御神鏡・奉納鏡と理解するのが自然であろうと思われる。

北海道地域に於ける和鏡の出土例は稀であると言っても決して過言ではなく、寿都町朱太川左岸遺跡出土の室町時代後半に比定される2面と千歳市所在の末広遺跡出土の同じく室町時代後期の所産である亀甲地文鏡が代表と言えるものである。

その中で、入舟・大川両遺跡出土の複数鏡は、和鏡の使用方法・信仰・流通等を考える上で和鏡の研究上極めて重要な資料であり、且つ和鏡研究に新たなフィールドを加えたものとして評価でき得るものであり、本遺跡からの更なる和鏡の検出が望まれるものである。